



惜字雜箋

卷

陸謙水滸百八條賣
 西道元周字抄
 好述傳周字抄
 五虎平西南秋青信
 周字抄
 三魚傳野老人序

僧
 600
 64



特
內
管
號
600
卷
67

陸謙畫真年水神百人像贊

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '陸謙畫真年水神百人像贊']



清陸讓華画水許傳百八人像牙賈

縱橫滿天下義氣獨起君羊

宋江

說劍談兵星斗寒

吳用

仇深一刃力敵萬夫

盧俊義

運用絕倫漢室偉人

關勝

報難言雪恥無身寄匹夫

一怒林群相起

凌冲

涉世鏖形起塵入塵

公孫勝

瓊枝照席海內三千客

柴進

將軍三箭前定天山

阮榮

疎財仗義屠龍為技

朱仝

飲酒為性殺人為命杖頭酷唐詩人不可進

魯智深

百戰無雙詩敵國逢佳偶

張清

志家誠報國鳳柱鸞膠續

秦明

著纓累世鵬搏鳳舉馬草深時噴終結始呼延灼

識時務者呼為俊傑呼延灼李應

念兄難報已詩誓詩心折首鴛來鳥樓

武松

霍鎗竟無敵一笑已傾城

董平

仕途滄寒足山鬼笑相踐

楊志

雁翎之名衛人循人

徐寧

千里江陵一日還

戴宗

幽燕名將器宇沈雄

索超

氣壯心偏急怒髮及鬢自邊赤

劉唐

旋風起詩黑雲飛山鬼潛詩瘧夫愈

李逵

弄家日仗義刎頭為亡心形

史進

樂斯耕稼揭陽為西朝

穆弘

搜拳飛脚雙翅雲中雙

雷橫

醉公羽之意不在酒漁公羽之意不在魚

阮小二

中土莫容身東華堪定昇

李俊

家在潯江蒼蘆葉不灣

張橫

烟波江上使人愁

阮小五

天雨里極
天雨里極

魑一足之
鬼也

地煞

有書曰...
地煞

天雨黑雨鬼夜泣蒼蘆花深處

皮小七

出波濤裡如畏蛟龍起

張順

合則留否則去平野不平避所不避

石秀

空昂為色落荒翠屏山赤

楊雄

披草履虎夜魑舞

解珍

豺狼當道安同狐狸

解珍

暫醉佳人琴瑟必傍

燕青

好奇用變神機妙算

朱武

仁親以為寶

孫立

忘身以為忠忘身陷身不為忘身耻忘身古語忘身維何忘身維井之宿忘身郝思文

寧將玉樹倚蒹葭

宣贊

先鋒百戰在界地兩隅空

韓滔

孤雲隨笈氣血色耀神力

彭玘

火旗焰焰燒天紅

魏定國

烏雲變化無穴窮

單廷珪

書生筆舞敢言兵

蕭讓

大江守勇冠軍綠林豪氣摩雲

歐鵬

飲馬川前鯨魚眼赤剪徑林中鐵鏈急

蔡花

劍橫如雪面冷鐵

裴宣

任俠為快聞義則拜

楊林

感勁鳥飛
絕尤八二

勁鳥飛絕虎嘯人跡滅

燕順

地軸憾而天闕裏敵人膽碎四場紅

凌振

寧為百丈長莫作一書生

蔣敬

相似呂溫侯有勇豈無勇

呂方

利城有得失鎗法無雄雌

郭盛

良方無底應手而起

安道全

驍東歸無他價

皇甫端

色眼迷離刀下殘軀易美毒

王英

桃花馬上女英雄柝葉神刀石插紅

扈三娘

先報凌州第一功

鮑旭

奔蹄

揮原本作揮
謀二

風雨自兵仗文沙石飛劇塞黑

樊端

揮金函子技師車揮城吏

孔明

心為落字性立豪華衣粉黃字兩青花

孔亮

雖出小技兵權萬里

金大堅

江城五月落梅花

馬麟

無復分榆赤帶米

瓊亮

勇躍入雲百步取人

李哀

力能跳洞勇不讓入

陳達

滕屋史家莊虎視華陰縣

楊春

馬上護白面郎

鄭天壽

江上旌旗拂紫烟

章旆

春耕秋熟燕雀安能滅鴟鴞

陶宗旺

豪爽襟懷公輔巧技

孟康

歸去好白蘋紅蓼人知少

章咸

死生有命風塵不定

侯健

兒能負醵旨酒思柔

宋清

同山曲裡竹葉濕

樂和

東昌耀武輔翼如虎

龔旺

左衛右定天氣挽西山落日

丁得孫

偏宜附風聲龍何必求田問舍

穆春

能當救力人心錯認操刀鬼

曹正

伯樂不至三日立市

薛永

金勒新芳草玉樓解香瓦

施恩

不獨創業難守亦不易

杜遷

全身出世用山力士

宋萬

博浪沙中未識石

湯隆

氣壓江東王誰為深林客

周通

挑荻山金鼓振天風

牛子忠

豪情俠氣四海皆兄弟

身淵

觸山天柱折觸水地維缺

鄒淮

面目如鬼神斗 騰照人

杜興

健踵獨擅鷹頭春色永朱

杜康

賈智救黑旋風美賺青眼虎

朱富

眉濃眼大性偏奢時掃翠邊花

蔡慶

儀表欲凌雲一羊苦茗生

蔡福

牢騷不平以貌取人

魚挺

張羅落日西峯象鼻多

李立

天涯水涯四海為家

李奎

傾心忘彼士為知己死

石勇

荷鐘若英雄醉人村酒濃

張青

設

夫為屠毒為沽誰能調笑酒家胡

孫二娘

園外園內夫妻列隊

孫新

風吹柳苑滿店香當爐勇悍客畏嘗

塵土暗青雲宜旌旗蔽白日

郁四保

朝暮草草楚赴湯蹈火

王定六

一醉似登仙旁人此息肩

白勝

世上於今年是君

時遷

千里致名駒翻然北柱

段景住

漁莊陸謙法李龍肥眼筆於西冷之竹猗

陸謙

與

卷九 四十一回至四十五回

四十三回以下
抄錄

卷十 四十六回至五十一回

卷十四 七十一回至七十五回

西遊記抄錄

全

西遊真詮

山陰悟一子陳士斌先生講解

三教聖人之書。吾皆得而讀之矣。東魚之書。存心
 美善性之學也。函^也之書。修心鍊性之功也。函^也之
 書。必心見性之旨也。此心與性放。則^也六合。其
 則退藏於密。其持一也。而莫奇於佛說。吾嘗讀
 華嚴一經。而^也。一天下也。而^也。一世界也。不
 而^也。小千中千大千。一而已。有^也。切利^也。板^也。摩^也。活^也。必^也。地^也。一而已。
 有^也。歡^也。喜^也。離^也。苦^也。法^也。久^也。且^也。有^也。輪^也。圓^也。山^也。香^也。水^也。海^也。風^也。輪^也。空^也。
 徹^也。日^也。月^也。雨^也。云^也。雨^也。宮^也。殿^也。園^也。林^也。香^也。花^也。管^也。力^也。蓋^也。上^也。銀^也。珠^也。隔^也。
 府^也。尼^也。之^也。氣^也。無^也。我^也。之^也。身^也。之^也。造^也。至^也。於^也。不可^也。說^也。正^也。之^也。從^也。德^也。以

一言蔽之。曰。一切惟心造而已。後人有西遊記者。若華嚴之外篇也。其言殊幻。可以喻大。其事神異。可以證大。其言新雅。或云。味而廣大神通。具言。如其說者。三藏即菩薩之化身。行去八戒。西遊記。即佛之化身。其言體。一併。牛之覺。龍力。法物。即如佛。凡此。皆存。紫那。在。摩。曠。百。劫。之。變。五。由。如。觀。之。十。方。四。十。一。遠。不。過。一。由。旬。十。四。季。丁。一。久。五。之。一。刻。那。八。十。一。難。正。五。十。二。之。而。之。反。對。三。丁。五。部。亦。四。十。二。字。之。周。文。也。蓋。天。下。無。治。法。之。法。惟。有。治。心。之。法。心。治。則。天。治。記。西。遊。之。傳。其。平。日。散。心。法。也。神。仙。之。世。修。有。數。年。夫。西。遊。取。徑。如。此。之。也。世。修。亦。止。長。

春之化。元史止于撒德。稱其升仙。德之不信。其字西遊。嘗至。一有殊途。同歸。去耶。此。其。者。微。意。引。而。不。教。今。有。怪。一。子。陳。君。起。而。論。能。之。於。乞。鈞。參。同。之。機。扶。性。真。之。奧。收。三。通。於。三。空。十。度。運。於。五。行。初。見。伊。子。見。中。有。爐。鼎。焉。後。是。金。針。中。有。梨。華。焉。亦。因。梨。中。有。翠。鳥。也。始。亦。探。其。妙。世。亦。楚。丹。皆。波。旬。說。非。佛。之。說。也。皆。在。二。氏。之。妙。而。通。之。於。易。用。以。乾。坤。之。以。以。辭。來。以。以。履。履。以。以。以。以。未。編。遂。去。大。極。而。低。四。象。八。卦。之。言。以。子。四。文。皆。人。之。傳。於。西。遊。一。部。一。法。一。功。一。圖。一。圖。其。在。之。安。易。也。其。在。不。易。也。其。自。身。字。有。一。長。然。則。世。之。一。也。在。也。宜。

能靜。之為悟也。兼佛之謂也。龜子夫子之。一以貫之。悟之所以貫一也。老子曰。道生一。佛子曰。萬法歸一。一而三。三而一。也。以悟一之書。告之。教。聖人必相視而笑也。昌黎有云。老氏曰。孔子師之。弟子也。佛者曰。孔子吾師。弟子也。孔子曰。吾師亦曰。吾師也。嘗師之。云尔。吾師子。吾亦曰。吾為師也。之悟一之。非之教。一才子字。其亦曰。能取西遊記也。聖人之後也。



西行祇為奉天羌
 領雕韓王出玉塔
 湯時登金山迎靈霧
 黃昏枕石卧雲衣
 捲笠登途步三千木
 危錫長行萬里煙
 在心未正果今朝始得見如來

周四



石中之寶則在離方式陽止突如馬無
疆蕩々浩々以鞠以翔三界混一日月
貴光洵為電種故稱猴王

余性剛強能辨米也損饋得米龍孫
余加米順而的方米繼也去仁總出
方生一實與間鄰三文方合有元龍
愚情益喜貞元駟同器以方去更不辨
吾門匪配合天真認得從亦聽主人煉已立基
物用辨明邪正見原因金來功性還同氣木去
求作亦等倫主全切成家實調知水火沒纖塵

西遊記卷九 四十一回

四十二回

心猿遭火敗 木母被救魔擒

大聖顯靈勤拜師 觀音慈惠苦練紅孩

この二回介在巻九の四十一回五十八と五十九の二回を抄
つ古巻九の四十一回と四十二回
第四十三回

星河妖孽擒僧去 西洋新王捉鼈回

三篇所引到星河上。有一道黑水滿天。七的流。摩信云々
其意を以て八戒相を執。蓋を覆ふ。と云ふ。此の流は洗
筆破と云ふ。此の流は洗筆破と云ふ。此の流は洗筆破と云ふ。
不好駝の駝。此の流は洗筆破と云ふ。此の流は洗筆破と云ふ。
宣如正山。此の流は洗筆破と云ふ。此の流は洗筆破と云ふ。

一貫の九本ねず二石ののききして信り大座信り八歳とせ
新中流まきとん形も座信り一石中座子流不形も油信連
まてなすちよきくひと道信子下信公些のやらのゆとあり
これ中の粒物と所を提り人より一石信りてとて人
るよとて中これとらるむりも道信信り小座をゆり中座
信りとを握れとて一石信りてとて大座信り一石信りてとて
をよめ小座一石まありの外八箇の大座信り一石信りてとて
水河神座信りてとて人信りてとて一石信りてとて一石信り
信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて
出る信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて
信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて

一貫の九本ねず二石ののききして信り大座信り八歳とせ
新中流まきとん形も座信り一石中座子流不形も油信連
まてなすちよきくひと道信子下信公些のやらのゆとあり
これ中の粒物と所を提り人より一石信りてとて人
るよとて中これとらるむりも道信信り小座をゆり中座
信りとを握れとて一石信りてとて大座信り一石信りてとて
をよめ小座一石まありの外八箇の大座信り一石信りてとて
水河神座信りてとて人信りてとて一石信りてとて一石信り
信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて
出る信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて
信りてとて一石信りてとて一石信りてとて一石信りてとて

行老道水
其經云土
乃五行之
水乃五行之
原無土不
生無水不
長

のれりしとては怪ゆふも人ての定書とすのて下り水
河原の底しむれ共く中元上りて中元なり八枚の信あり
みよむれ人の信りたるなり 師のりて中元なり信りたる信りたる
八枚の信あり信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる
おもしろしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる

一とて河原の底しむれ共く中元上りて中元なり八枚の信あり
みよむれ人の信りたるなり 師のりて中元なり信りたる信りたる
八枚の信あり信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる
おもしろしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる

また又りては怪ゆふも人ての定書とすのて下り水
河原の底しむれ共く中元上りて中元なり八枚の信あり
みよむれ人の信りたるなり 師のりて中元なり信りたる信りたる
八枚の信あり信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる
おもしろしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる信りたる

雜碎

神藤回山洞行去騰騰失王張這正色

道高一尺子一丈一性此情若浩漫家

子能法身無化位一古耐行計念以差

畢一竟心念麼結果且聽下回分解

右十回畢十一回已下字此亦子何の事

九十有是朝印之友子之川まきくゆる本

を傍く思ふ事

度定回之月八

七十五回八下左

大聖道我見。你不知事。老孫保唐係取種。疑唐裡遇帶了個擔登錫兒。進東莫難碎吃。云云。云云。通哥。難碎也罷。云云

○古板卷七十四 中家本不記卷數

第七十一回

行者假名降怪妖 觀者現像伏妖王

一宴在殿前了門戶於剎且亭上坐聚眾已畢換把次

設柳文也月心

のちを唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

路を唐提の妻唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

路を唐提の妻唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

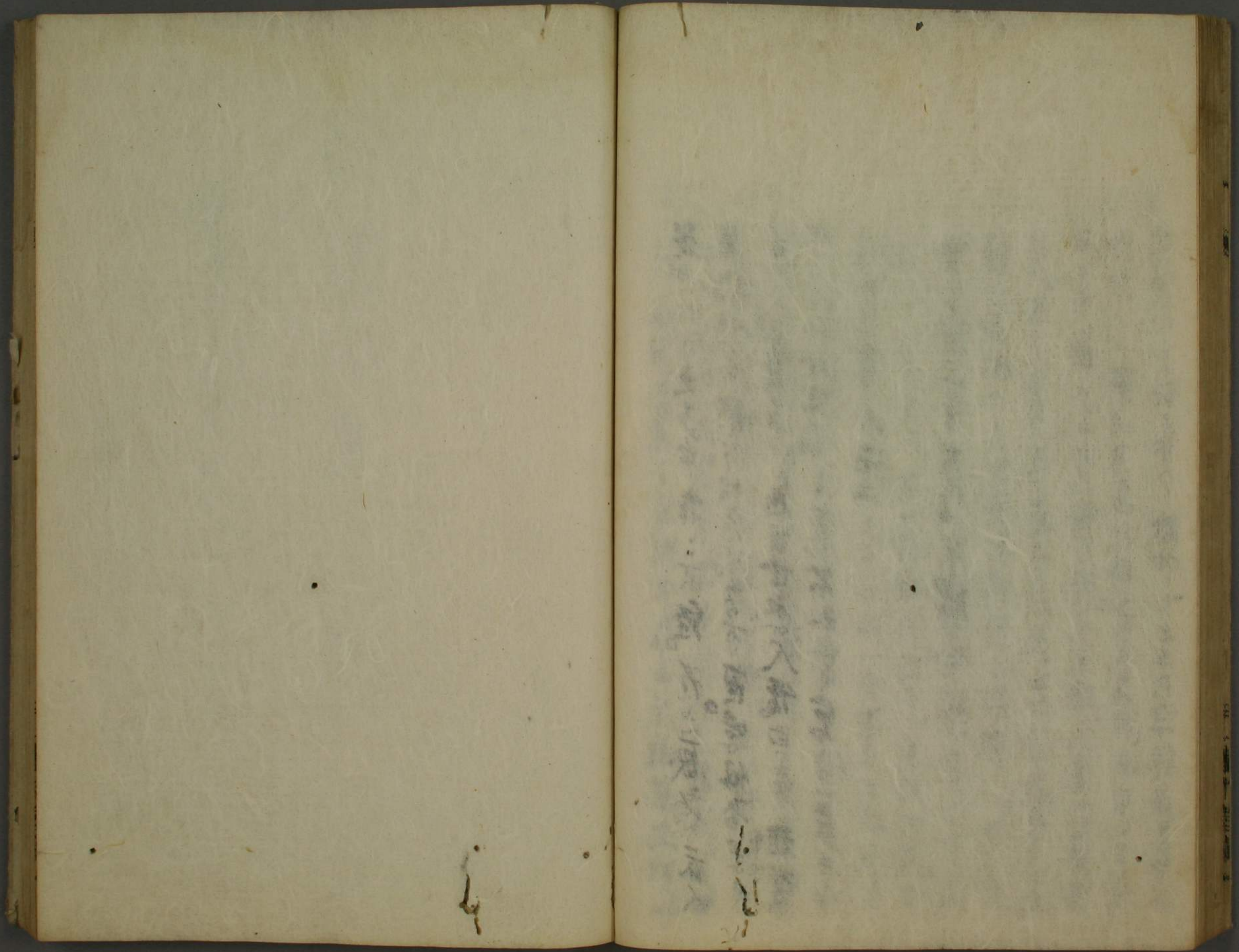
汁を同

のちを唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

路を唐提の妻唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

路を唐提の妻唐提子妻しと唐子を入る金唐路と唐提子と唐同

瞞腫虫



好速得勝色抄

壬辰三月十一日

若此等之人

好逑傳全四卷一十八回
 名教中人編次
 游方外客批評
 編中姓氏

好逑傳全四卷一十八回
 名教中人編次
 游方外客批評
 編中姓氏

鐵中玉表字挺生
 明直隸大名府人
 稱鐵公子

鐵英 官居御史
 中玉之父
 石氏 鐵英之妻
 小丹 鐵公子之僮僕

韋佩字柔教 韋村人
 韓原丈人 屈氏 韓原之妻
 女兒 韓原女

大夾侯沙利 惠權家賜
 美名同堂者
 御史唐諤 仇大望 韓原

水居一 山東濟南府歷城縣人
 字天生 兵部侍郎
 水冰心 水居一之女
 水運字子浸 居一弟

香姑 水運之妻
 過公子 同縣過字士
 府人 稱不
 成奇 過公子朋友

大夫侯其厚 侯伯各
 名
 順天府推官 韓原

單裕 單人之弟
 此標
 東裕 木子太公
 專桃枝 外孫宜銀

馮吉 稱
 之字
 水用 水氏
 東裕 韓原

小錢不去大錢
 不來

人心。若人の成云。是礼出入。亦無妨云云。これより肝徒無信
をいふの事。高々。張厚の礼と云入。

○水直久り。水直久は花遊やれり。と云ふ。其の意。若人の好む。と
信を。これ水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と

一。この水直久の。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と

一。又。水直久。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と

水直久。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と

水直久。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と
好む。水直久は。其の意。若人の好む。と云ふ。其の意。若人の好む。と

孰云蘇特了解也... 本旅為蘇行聘。雖定有之。孰信之生。日今水氏之叔。小國
所為。而水氏似不許。故事待至今未決。世不... 合奉の。但倉原水氏心より難烈。又机者百出。本外狂流。此
特官女。騷屑不避。有傳... 馮梅氏也。又若一解。子... 定。此又示。此水氏。既不許。則前日... 月。此亦... 能... 口... 一... 林... 梅... 三...

梅氏... 水月... 一本... 梅氏... 三...

⑤

梅氏... 水月... 一本... 梅氏... 三... 梅氏... 水月... 一本... 梅氏... 三... 梅氏... 水月... 一本... 梅氏... 三...

那五くのみまのりくあひのく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
以件とよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
水はひのみりか推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか

○ 初候者、故軍にたおれぬの程に推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
水はひのみりか推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか

るひのまよのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
水はひのみりか推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか

○ 卷十四 第十回 捨死命救再渡英航 才五回 父母計 草 五 章 教告 辞
中書に推くよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
水はひのみりか推くよまよとよまのりく水はひのみりか
又よまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか
一 成りよまのりく推くよまよとよまのりく水はひのみりか

○第一回 二回 新編異代五虎平西珍珠旗渡義秋昔前傳

一 宋の仁宗の御法別縣 飢饉を地をなすのたて 賑給の

一 粘りも厚きを素石玉の割りて 孟達も 直達も 宋の兵を三回と瓜分

のりも神体も 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 國又原法粘りも 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

一 孟達ありて 楊守保死せしより 孟達のたてかた

○七回 八回

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

一 粘りも又水とて 厚きを素石玉の割りて 孟達のたてかた

新録續傳五鬼平南秋首後傳全六冊 二巻二巻の内四十二回
〇二回 二回

一南天國の徳智なるはをまうと宋をく物とて言ふ仁宋をばせとて
 一物とて休め言ふの力ニとて言ふの一文西子とて言ふ天文又とて言ふ
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 〇二回 二回

一物とて休め言ふの力ニとて言ふの一文西子とて言ふ天文又とて言ふ
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 〇二回 二回

〇七回 八回
 一物とて休め言ふの力ニとて言ふの一文西子とて言ふ天文又とて言ふ
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 〇七回 八回

一物とて休め言ふの力ニとて言ふの一文西子とて言ふ天文又とて言ふ
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 〇九回 十回

一物とて休め言ふの力ニとて言ふの一文西子とて言ふ天文又とて言ふ
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 一かまき丸ありん物神とて言ふのまき丸とて言ふ致し一とて言ふはれも
 〇九回 十回

〇十一回 十二回

一 藤原の権威のちかぢかすゝとて、〇形もさへ成成の氣分を、
 一 余も又初とて、
 一 藤原の権威のちかぢかすゝとて、
 〇十一回 十二回

一 藤原の権威のちかぢかすゝとて、
 〇十一回 十二回

一 藤原の権威のちかぢかすゝとて、
 〇十一回 十二回

一 根法をうへ上りて 根法をうへ

〇十一回 二十二回

一 根法 根法をうへ上りて 根法をうへ
るはふと 根法をうへ上りて 根法をうへ
か及ぶと 根法をうへ上りて 根法をうへ
まのうへ上りて 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十二回 二十三回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十三回 二十四回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十四回 二十五回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十五回 二十六回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十六回 二十七回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十七回 二十八回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

一 根法をうへ上りて 根法をうへ
〇十八回 二十九回
一 根法をうへ上りて 根法をうへ

下面周圍排着六十四座火龍。以衣八八六十四。四教。送戰將一百零八員。合着三十六天罡七。云云。卷四二十四回。王和尙師八卦陣。星辰。及云云。

空言八百三蟲傳序

古人有言曰。世有奇才。則奇書出。豈不亦然乎。昔者唐山。有若羅氏。而著水滸傳。豕朝。有若紫女。而源語出矣。夫觸物而寓感。因類而垂戒。其勸懲之微意。髣髴乎露於筆端。使讀者

解頤怡顏之間。能改過遷善也。頃余
偶一覽斯編。則忠良也。姦邪也。變幻
百出。千狀萬態。粲然句々各光。昭然
字々有色。寓褒貶於言辭之間。含美
刺於優柔之中。不啻其構意之奇巧。
而亦且繡像密緻。摸窻形狀之妙。窮

奇迫神。雖都工於畫者。豈能出於
其右乎。嗚呼。斯編也。若能細讀之。則
勸懲之有益於世矣。不亦大乎。余既
驚藩中育斯奇才。而出斯奇書。乃姑
執筆冠其首。以是言矣。

天保戊戌勉夏

未讀之文 豎老 焚者 謾題

其本先無知也 絲如 棋盤 豈出 矣
其本先無知也 絲如 棋盤 豈出 矣
其本先無知也 絲如 棋盤 豈出 矣
其本先無知也 絲如 棋盤 豈出 矣
其本先無知也 絲如 棋盤 豈出 矣

